平成 28 年度　千里丘北留守家庭児童育成室の検証結果について

平成 29 年 6 月

吹田市教育委員会

地域教育部放課後子ども育成課

吹田市立千里丘北留守家庭児童育成室「蓮の子学級」（以下、「千里丘北育成室」とする）については、平成 27 年 4 月小学校の開校に合わせて開室し、同時に運営業務を社会福祉法人に委託している。

児童福祉法においては、事業に必要な水準を確保するために市町村による事業者への調査や命令等が定められており、運営業務を民間に委託している留守家庭児童育成室（以下、「育成室」とする）に関しては、直営で運営している育成室とは違い前述のような観点から、平成 27 年度からの変化や平成 29 年度への推移を含め、放課後子ども育成課による検証を行い報告するものである。

～検証方法～

1　放課後子ども育成課職員［担当事務職員、スーパーバイザー（元公立保育園保育士）］による現地視察（週 1 回程度）。

2　保護者へのアンケート：年間 3 回
（1 学期利用について、夏休み 2 学期利用について、年間利用について）

3　事業者への聞き取り

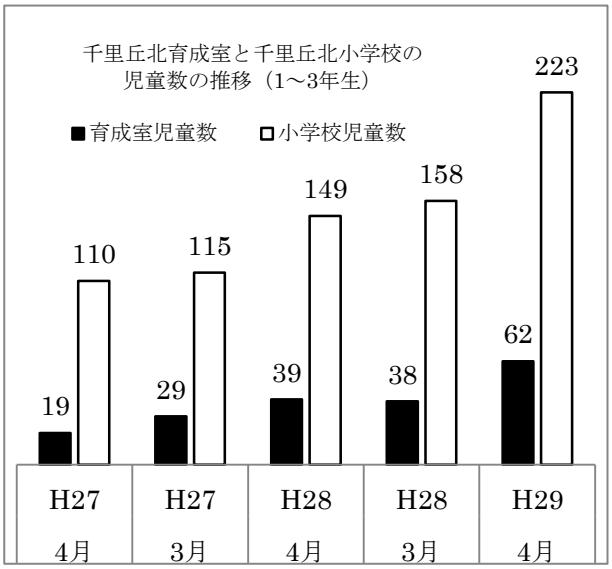
4　チェックシートを用いた業務の履行状況の確認と評価

1　入室児童について

（1）入室児童数について

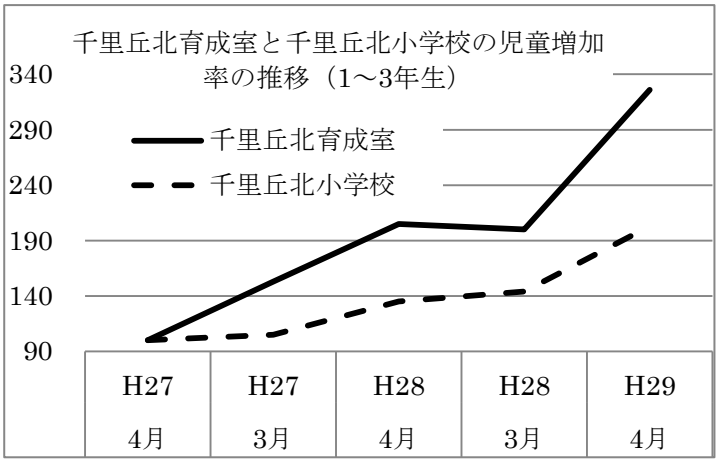
育成室がある千里丘北小学校区については、周辺地域の大規模な開発により建設されたマンション群が大部分を占めている。マンションには若い世代の入居が非常に多く、今後しばらくの間については、学齢期に達する児童の数が急速に増加するとの推計が出されており、千里丘北育成室の入室児童数もそれに合わせて急増する予測が出ている。【表 1】

【表 1】



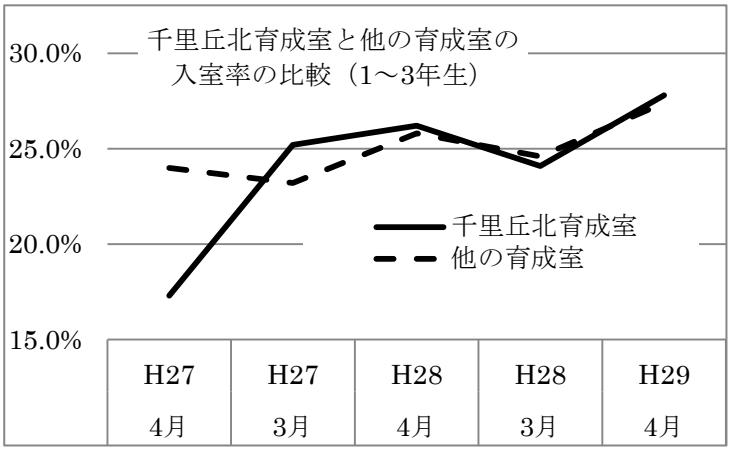
千里丘北育成室と千里丘北小学校の児童数の増加率（平成 27 年 4 月を 100 とした数値）については、【表 2】のとおりとなっている。

【表 2】



千里丘北育成室の増加率が千里丘北小学校の増加率を大きく上回っていることについては、千里丘北育成室開室当初の認知度が低いことが影響しているものと推測される。校区が分轄される前から他の育成室を利用していた児童は、全員千里丘北育成室に入室しており、「千里丘北育成室は、吹田市において運営業務を民間に委託した初めてのケースであり、保護者が運営内容に不安を感じるために入室をしなかった。」という事象はなかったと考えられる。

【表 3】



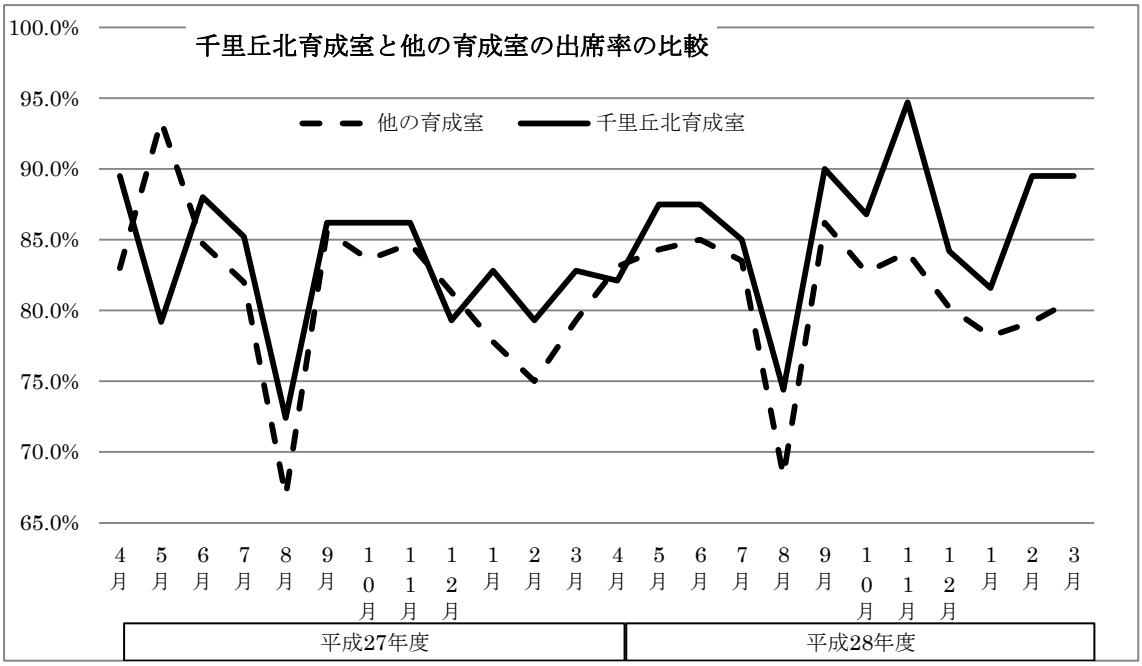
他の育成室との入室率（小学校児童数に対する育成室児童数の割合）の比較においては、千里丘北育成室の開室当初は他の育成室に比べ低い値であったが、平成 28 年度からは、他の育成室と同じような値となっており、この値からも保護者が民間事業者である現在の委託事業者に対し、運営内容に不安をもっているため、入室を控えていることは読み取ることはできない。【表 3】

（2）入室児童の出席率について

留守家庭児童育成室の入室児童については、塾やスポーツなどの習い事や課外クラブ他の理由により、申請児童全員が出席することはほとんどなく、小学校の授業実施日においては、80%～90%程度の出席率（申請児童に対する出席児童の割合）、小学校の長期休業期間（夏休み等）においては、65%～80%の出席率となる。

千里丘北育成室については、平成 27 年度の開室当初こそ他の育成室に比べ児童の出席率は低い傾向が見られたが、すぐに他の育成室と同じ傾向を辿るようになった。さらに、多くの月において、他の育成室よりも高い出席率となっており、千里丘北育成室については、保護者の就労支援という役割は十分に果たせているものと判断できる。【表 4】

【表 4】



2　保育内容について

（1）日常における保育の取り組みについて

千里丘北育成室の日常の保育の取り組みとしては、仕様書に沿って行われており、児童の健全育成への貢献は十分であると認められる。理由としては以下を挙げることができる。

ア　連絡帳の確認がきちんとなされている

育成室の入り口には指導員の机が置かれており、児童が育成室へやって来ると、まず、連絡帳を提出することとなっている。連絡帳は家庭と育成室をつなぐ大切なツールの一つであるため、連絡帳をいち早く確認し、児童の健康状態や早帰り（育成室を早退すること）等の予定を把握し対応することで、児童・保護者との信頼関係を損なわないようにしている。

イ　基本的なスケジュールが明確である

基本的なスケジュールについて、児童は育成室でまず連絡帳の提出をすると、宿題を行うことになっており、宿題を終えてからそれぞれ自由に遊ぶこととなっている。学年によって育成室への帰室時間が異なるため、児童全員が同じ行動をとることはできないが、育成室は「宿題を行う部屋」「遊ぶ部屋」のように目的ごとの部屋はないため、「宿題を行うスペース」「遊ぶスペース」と区切りを設けている。そうすることで、児童も集中して宿題を行うことができている。

ウ　運動場での外遊びの際は必ず指導員を配置している

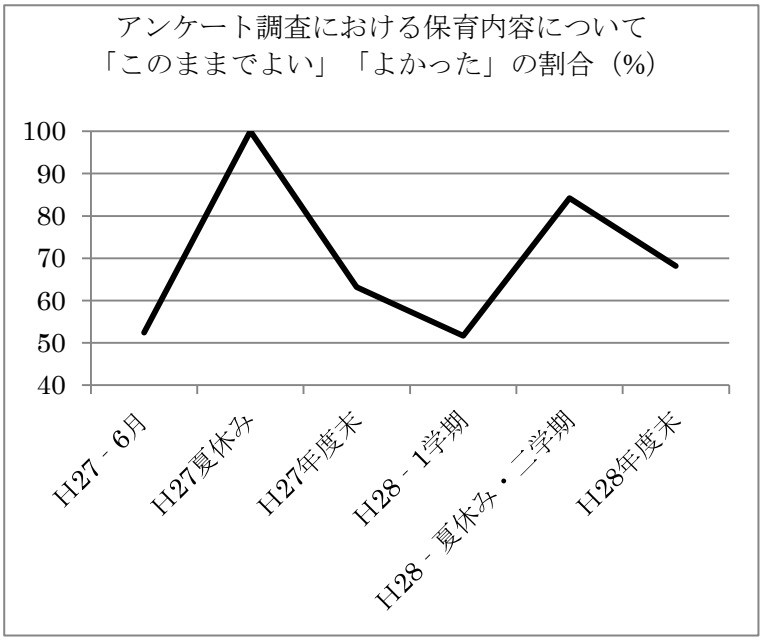
千里丘北育成室では、小学校の運動場を使用して外遊びを実施しているが、部屋と運動場が離れており、部屋からは運動場の様子が全く見えないため、外遊びをする際は、必ず運動場に指導員を配置し、安全面に気を付けている。

また、外遊びについても、指導員はただ自由に遊んでいる児童を見守るだけでなく、ドッジボールやサッカーなどの集団遊びを組織し、児童の集団作りを積極的に行っている。

これらのことについては、特に目新しいものではなく、他の育成室でも行っていることではあるが、このような基本的なことを丁寧にしていることが、児童の健全育成にとってとても重要である。

（２）保育内容に対する保護者の意見について

【表 5】



保育内容に対する保護者の意見については、これまで行った 6 回のアンケートの調査結果から、回答があった過半数の保護者は「このままでよい」や「よかった」としており、現在の取り組み方を変える必要はないと回答している。アンケートの回答の中では上記のものが多数を占めているが、次に多かった意見として「子ども達みんなで行う取り組みを増やすべきである」が多く、全体の 10%程度を占めている。

これまでも、子ども達が集団で行う遊びには積極的に取り組んではいるが、今後は、さらに一段階進めて、子ども達が主体的に考える取り組みを増やしていくことにも注力する必要があると言える。

なお、「H27 夏休み」の評価が高いのは、入室児童数が少なく、委託事業者独自の取り組みである「そろばん」に十分時間をかけて取り組む事が出来たためと考えている。（「４　委託事業者独自の取り組みについて」参照）【表 5】

（３）イベント（クッキング保育やお誕生日会等）について

クッキング保育やお誕生日会等のイベントについては、他の育成室と同程度に実施している（クッキング保育は小学校長期休業中を中心に週 1 回程度、お誕生日会は毎月実施）。特に、クッキング保育については児童にも大変人気があり、保護者からたくさんの要望も寄せられているものである。メニューについては、「カレーライス」や「焼きそば」のような定番のものから、「ビビンバ」や「チョコフォンデュ」のような少し趣の違うものまであり、工夫の跡が見られる。

（4）おやつの提供について

留守家庭児童育成室おけるおやつの提供については、考慮しなければならないことが数多く存在する。

まず、アレルギーを持つ児童に対する配慮である。近年は「卵」や「小麦」、「乳」、「えび」等の食品表示基準に定める7品目の特定原材料だけでなく、オレンジやキウイフルーツのような「果物」や「米」にもアレルギー反応を示す等、アレルゲンが多様化しており対応が難しくなってきている。しかも、症状も重くなってきており、「同じ鍋で調理したもの」「同じ製造ラインで製造されたもの」でも一緒にできないケースも存在している。

その他、多くの要望が寄せられる事項として、おやつの量がある。おやつの量については、児童の体格差や家庭での夕食の時間等、様々な要因によって児童ごとに異なるため、保護者からの要望も「量が多い」や「量が少ない」、「腹持ちの良いものにしてほしい」や「できる限り軽くしてほしい」等、相反するような要望に対応する必要がある。また、アレルギーはなくても栄養や添加物、油脂、糖分にも十分な配慮が必要である。

千里丘北育成室についても、アレルギーを持つ児童も入室しているため、「その児童のアレルゲンとなっている原材料が含まれていないと確認できた物しか購入しない」「おやつの配膳時に再度、確認をおこなう」等の二重のチェック体制をとっている。しかしながら、万一の場合に備えて、アドレナリン自己注射薬（エピペン）の講習会に参加したり、保護者とあらかじめ、主治医や緊急搬送先等を聞いておく等の対応をとっている。どうしても対応が困難な場合は、保護者におやつの持参を依頼するが、その児童の気持ちを考慮して、その児童も食べることができるものだけでおやつを構成する日を設ける等、それぞれの児童の状況を考えながら、できるだけすべての児童がおやつを楽しむことができるよう工夫している。

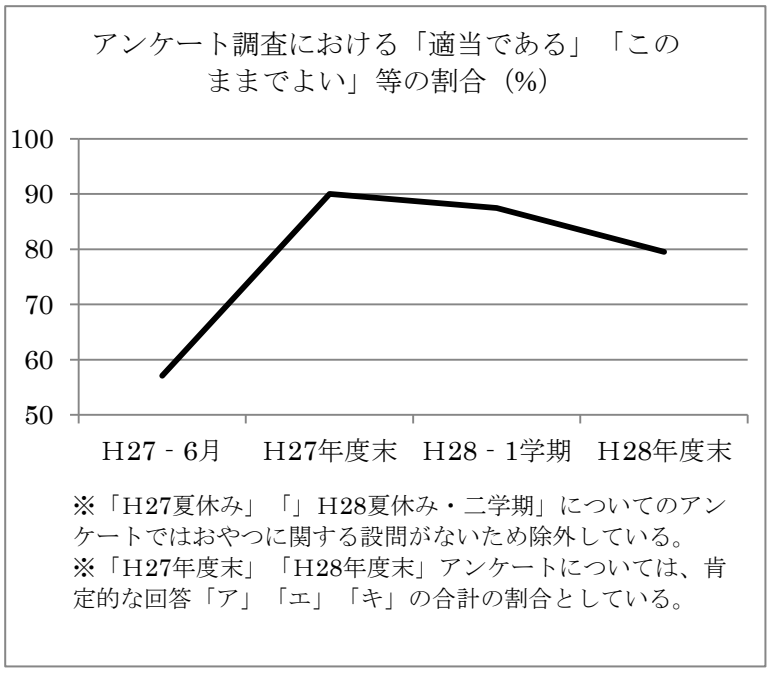
おやつの量についての要望に対しては、子ども達自身が「おかわり」でおやつの量の調整をすることで対応している。その他の配慮としては、果物については、衛生面を考え、りんごのような包丁で切る作業が必要なものは提供せず、みかんのようなものを提供するようにしており、また、メニューの選定時に添加物や糖分等の成分に気を付け、パンのような腹持ちのよいものを小学校の授業が短い曜日には提供するようにしている等、児童・保護者の様々な事情や要求にできるだけ答えようとしている姿勢を感じることができる。

（5）おやつの提供に関する保護者の意見について

先ほどと同様、これまでのアンケートの回答では、おやつに関して「このままでよい」や「適当である」等肯定的な意見は、当初は60%を切っていたが、次第に増加していき、80%～90%前後と高い支持を得ている。

しかしながら、量が多いという回答や量が少ないという回答も少数ながら存在しており、おやつの提供の難しさも浮き彫りになっている。【表 6】

【表 6】



3　指導員について

（1）指導員の配置について

平成 28 年度の千里丘北育成室については、児童数が最高 40 名であったため、ちょうど 1 教室での運営体制であり、配慮を要する児童が在籍していないため加配要員がおらず、指導員配置は、学級配置の 2 名のみであった。しかしながら、現在の委託事業者は児童数を考慮して、基本的には 4 名以上の指導員の配置を行っていた。

主任指導員についても、保育士の資格を有する事業者の正規職員が任に当たっており、何かある場合は必ず主任指導員が窓口となる運営が確立されており、保育内容の決定をはじめ小学校や放課後子ども育成課との調整役としての役割も十分に果たせていたものと判断できる。

（2）指導員の児童との関わりについて

現在の委託事業者については、指導員と子ども達のかかわりを重視しており、そのため、市の職員が千里丘北育成室を訪問した際は、必ずと言っていいほど、指導員が子ども達の輪の中に入っていたり、子ども達と声を掛け合っていたりしている。子ども達との関わる時間を確保するため、連絡帳の記入については特に連絡がない場合は、サインやハンコ等簡易なもので対応することとしており、保育時間中に指導員が机で事務作業に没頭をしている場面はほとんど見られない。

そのため、指導員と子ども達との信頼関係がしっかりと構築されており、場面の切り替わりにおいても指導員の指示もスムーズに子ども達に入っている。また、喧嘩や悪戯等により指導員に叱られた場合でも、ふて腐れて飛び出したり、指導員に反抗して暴れるような行為も見受けられない。

子ども達は指導員を信頼しており、指導員は子ども達の心をつかんでいるので、千里丘北育成室は賑やかに声が交じり合っているが、楽しい雰囲気を持った育成室となっている。

（3）指導員に関する保護者からの意見について

これまで行ったアンケートでは、平成 27 年度の 3 回目と平成 28 年度の 3 回目に指導員についての設問がある。どちらの回についてもこの設問は複数回答可としており、指導員に対して保護者がどのような考えを持っているかを聞く設問となっている。

実施回によって回答項目数や内容に多少違いがあるが、回答が多かった順に上位 3 つを挙げると以下のとおりなっている。

○「平成 27 年度末」アンケート

1 位…「指導員は児童の輪に入り、積極的に児童と関わりを持っていた」20.3%

1 位…「いつも明るく、元気に児童や保護者と接することができていた」20.3%

3 位…「清掃や整理整頓など、育成室をきれいに保つために努力をしていると感じることができた」18.9%

○「平成 28 年度末」アンケート

1 位…「指導員は児童の輪に入り、積極的に児童と関わりを持っていた」25.0%

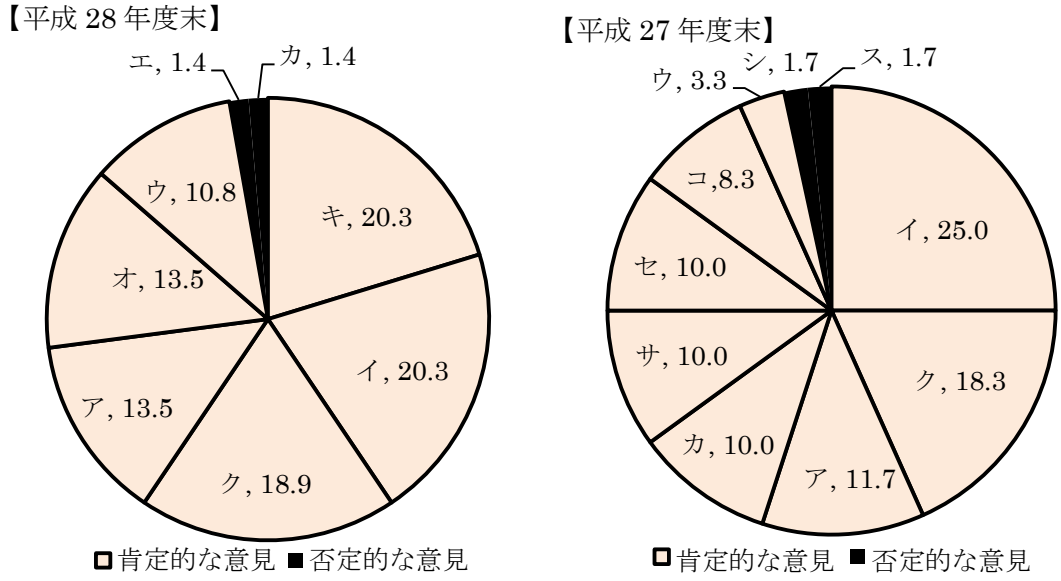
2 位…「いつも明るく、元気に児童や保護者と接することができていた」18.3%

3 位…「児童の相談に乗り、児童の気持ちに寄り添うことができていた」11.7%

上位の 3 つの回答で全体の 55%～60%を占めており、さらに指導員に対して肯定的な意見をすべて含めると、平成 27 年度末のアンケートでは全体の 97.2%、平成 28 年度末のアンケートでは全体の 96.6%と非常に高い評価を得ていることがわかる。

しかしながら、少数意見ではあるが、距離感を感じていたり、日頃の様子を知らせていないと感じている意見もあり、更に高い評価が得られるように期待したい。【表 7】

保護者アンケートにおける指導員の評価に関する回答【表 7】



※各項目の内容については、別添アンケート結果を参照

4　委託事業者独自の取り組みについて

（1）「そろばん」の取り組みについて

千里丘北育成室では、委託事業者独自の取り組みとして「そろばん」が行われている。「そろばん」については、事業者が児童１人に１台タブレット端末を貸出し、タブレット端末に沿ってそろばん学習を進めている。したがって、学年や得手不得手による進行度合いの違いは解消されており、育成室内に指導者を置く必要もない。

実際の進め方としては、小学校の授業実施期間は児童が育成室に来るのが遅くなるため、1 日当たり 10 分から 15 分程度の短い時間しかできず、育成室に来る時間によってはできない日もある。一日保育時はある程度時間を取ることができるので、おやつを食べてから自由遊びに移る等の、場面の切り替え時に導入することにより、子ども達もスムーズにそろばんに取り組むことができている。短い時間でも何度も取り組むことにより、計算力・集中力の向上に寄与することができている。

千里丘北育成室で取り組んでいるプログラム

【玉井式 Ee そろばん　https://www.kec.gr.jp/tamaishiki/education/eesoroban.html】

（2）親子参加型プログラム「蓮の子ふれあいクラブ」について

現在の委託事業者は、忙しい保護者の負担を可能な限り減らすことができるように千里丘北育成室の運営を行っており、イベントについては基本的にすべて事業者の指導員のみで行うようにしている。しかしながら、それでは家庭や保護者同士の交流の機会がないために、小学校の１･2･3 の学期ごとに１回、第 4 土曜日の午前中を使い、親子参加型プログラム「蓮の子ふれあいクラブ」を開催している。内容については、2 部構成になっており、第 1 部が室内外で親子または保護者同士の交流を目的としたゲームを実施している。「ドッジボール」のような定番のものから、「逃走中」などの流行のゲーム、「HASUNOKO　GO」というスマートフォンのカメラ機能を使い、小学校の一部分をアップにした写真の場所を捜す独自のゲーム等、いろいろと趣向を凝らした催しを行っている。第 2 部は、育成室の中で、茶話会の形式で指導員が最近の様子を話したり、質問に答えたりする場を設けており、指導員と保護者の交流の場となっている。普段は忙しい保護者にとって、他の家庭と交流を図ることができたり、育成室の雰囲気を感じたりすることができる時間となっており、とても有意義なものとなっている。

（3）事業者独自の取り組みに関する保護者の声について

「そろばん」の取り組みについては、千里丘北育成室開室当初から保護者に好評であり、「もっと進めてほしい」という意見も出されており、保護者からのニーズに合わせた取り組みがなされている。宿題の取り組みとともに育成室での学習活動に高いニーズがあることは間違いないが、一方で、授業から帰ってきて、また勉強をさせるの

は忍びないという意見の保護者も存在しており、今後は、相反する要望のバランスを取りながら運営するという、難しい課題に対応する必要がある。

親子参加型プログラムについては、保護者の出席率もかなり高く、アンケートでもほとんどが肯定的な回答となっている。もっと多くの開催を求める声もあり、どこまで保護者の要望に応えていくかを検討する必要も生じている。

5　総合的な評価について

（1）放課後子ども育成課による評価について

放課後子ども育成課職員（担当事務職員、スーパーバイザー）による現地視察および事業者への聴き取りによる検証による総合的な評価として、千里丘北育成室の運営については、以下の理由により、かなり高く評価をすることができる。

1　育成室では、入室児童が笑顔で楽しく過ごしている。
2　指導員が常に子ども達とコミュニケーションをとっている。
3　連絡事項については、主任指導員、委託事業者、放課後子ども育成課の間で共有が図られており、組織だった運営が行われている。
4　育成室の運営では、直営育成室の取り組みの内容をベースに組み立てられており、平成 27 年度にはあまり見られなかった、けん玉を使った遊びを行っている等、子ども達にとって望ましいものを取り入れていく姿勢が見られる。
5　保護者への情報提供の場として、懇談会を育成室全体・個人の両方開催しており、オープンな運営を心掛けている。
6　事業者独自の取り組みについても、保護者・児童のニーズを的確に把握しており、満足度も高いものとなっている。

また、項目を立てて記述することはなかったが、以下の事項でも高い評価をすることができる。

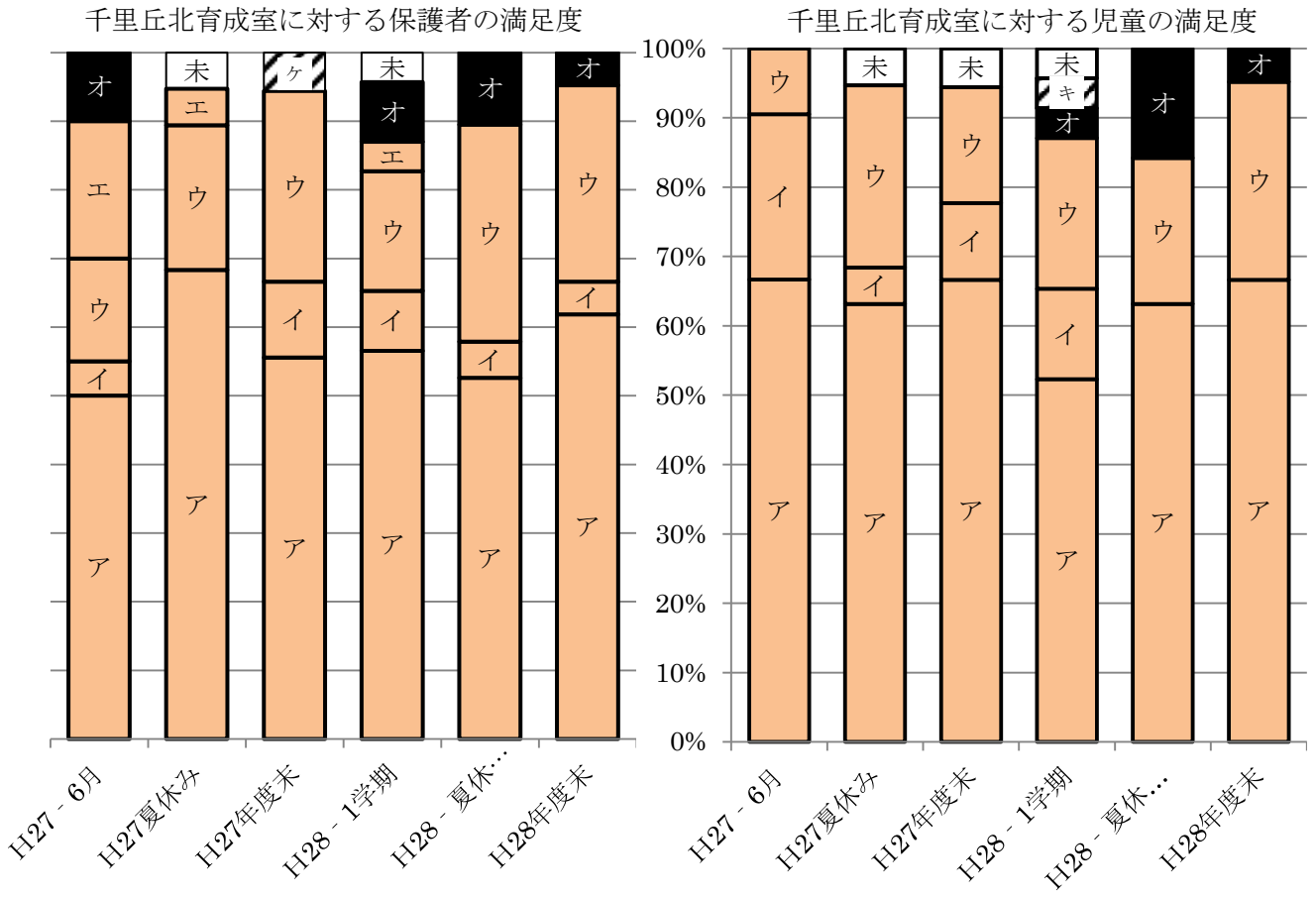
7　小学校とも連携が図られており、日常の様子や小学校の行事等の情報が共有されている。
8　太陽の広場（全児童対策事業）とも連携が図られており、連携会議に出席して情報交換を行ったり、運動場で一緒に遊びの活動を行っている。
9　怪我が起きた際にも迅速な対応がなされており、病院への搬送、保護者への連絡、小学校への連絡、委託事業者への連絡、放課後子ども育成課への連絡ができている。
10　台風やインフルエンザによる臨時休校や学級閉鎖についても、常に小学校や放課後子ども育成課と連絡をとり、児童に混乱が生じないように努めている。

（２）保護者へのアンケートにおける総合的な評価について

これまでの保護者へのアンケートには、「子ども達にとって千里丘北育成室はどの程度楽しい場所か？」を聞く設問と、「保護者にとって千里丘北育成室はどの程度満足できるものとなっているか？」を.聞く設問を設けている。その結果から見える、事業者の運営状況の総合的な評価としては、「保護者や児童からも、概ね高い評価を受けている」と言える。

しかしながら、保護者へのアンケートでは少数であるが、「指導員との距離を感じる」「育成室での出来事が伝わってこない」「子ども同士のトラブルを放置したままになっている」等、指導員として求められるべき部分ができていないとする意見もあり、全体的な評価の良さに楽観視せず、現在の高い評価が落ちてこないように、これからも注意していく必要がある。【表 8】

【表 8】



【表の見方】

	ア	イ	ウ	エ	■ オ	カ	キ	ク	ケ	未
保護者	十分満足できる				どちらでもない				不満である	未回答
児　童	とても楽しい場所				どちらでもない				つまらない場所	未回答

評価が高い　　評価が低い

6　終わりに

これまでの放課後子ども育成課の職員による視察や保護者へのアンケート等によるいろいろな検証、その他小学校をはじめとする関係機関との日々の連携による状況把握の結果、現在の委託事業者は平成 27 年度に引き続き、平成 28 年度についても良好な保育や育成室運営が行われていることが確認できた。

放課後の時間帯に家庭に保護者がいない留守家庭児童にとって、育成室は「第二の家庭」である。家庭では子ども達がいろいろな姿を見せるのと同じように、育成室でも様々な姿を見せている。良い姿ばかりではなく、周りに迷惑をかけるような悪い姿を見せることもある。そういった、子ども達の多様な様子をしっかりと受け止め、保護者・小学校・放課後子ども育成課と常に連携を図りながら、時にはやさしく、時には厳しく、これからも子ども達の指導に励んでもらいたい。